
触らないで下さい！！

あんどろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触らないで下さい！！

【Nコード】

N2090BA

【作者名】

あんどろ

【あらすじ】

ガーティレン帝国宮殿に勤めるメイドのカルラ。カルラは人に触れないという、所謂潔癖症。そんな彼女はある日、偶然皇帝陛下に出会い、手に触れられてしまう。異性に触れられ、目眩と共に意識を手放してしまう。……これは、触れないカルラと触りたい皇帝陛下のとある物語。

第1話

うむ。

今日も良い天気になりそうだね。

私、『カルラ・エルシーラ』は櫛も通してないボサボサな藍色の長髪に、パジャマを着たまま小さな出窓から身を乗り出し、まだ日が出ていない薄暗い空を見た。雲が一つもなく、あと数分後には見えなくなる星達が瞬く空を朝、起きたらまず確認するのがここに来てからの日課になっている。

ここはガーティレン帝国の宮殿。

この世界に一つしかない大陸の中でも、最大級を誇る広さを持つ宮殿だ。この宮殿の広さと言ったら、五年も働いているカルラでもたまに迷ってしまう位で（方向音痴という訳ではない）、寧ろこの宮殿すべての構造が分かる人がいるのかと思う位とにかく広い。

2

そんな宮殿でメイドをしているのが、中級貴族エルシーラ家の長女のカルラである。カルラは幼い頃から宮殿で働きたいと思っていたので、十五歳になるとすぐにメイドとして働き始めた。

中級貴族と言えど、それは叔父夫婦が上級貴族で流石に親戚が貴族じゃないのは困ると言うこともあり、ギリギリ漕ぎ着けた地位である。そのため、エルシーラ家は貴族は貴族でも、貧乏貴族なのだ。家は立派だが、生活は平民と変わらない。メイドもいなければ料理人もいない。長女のカルラは必死に稼ぐ父と母を見てきたため、早くに自分が仕事に就くことに決めた。普通の貴族令嬢は、十五歳とあれば学校に通うものだが、カルラは最低限の礼儀と学力だけあれば十分と言って憧れの宮殿へ行ったのだ。

あれから五年。

カルラは二十歳になった。

メイドとしての仕事にも慣れたし、今の生活にも満足している。毎月家に仕送りをしているから、一応家のことは大丈夫だと思うし。

「よし。今日も頑張ろう」

いつも通り気合いを入れ、音が立たないように出窓を閉める。

カルラは身支度を始めた。

「おはよー、カルラ」

「おはよう、レイチエル」

同期の「レイチエル・ブラッド」は、眠たい目を擦りながら食堂で朝食を取っていたカルラの隣に座った。

「レイチエル、寝癖」

「んー…どこ？」

「前髪の右側」

ショートカットの金髪をペタペタと触るレイチエル。

「わかんないよー。直してえ」

「……っ」

「あっ…ごめん」

「……大丈夫」

レイチエルはすまなそうに肩をすくめた。

カルラはどうも人に触るのが苦手である。

触られるのも苦手で、特に免疫のない異性に触れたら…考えただけで目眩がする。

何故だかはわからない。いつからこんなに嫌になったかもわからない。

人に触るのは生理的に無理なのだ。

因みに、布を挟んでいればギリギリ触られる。要するに、服の上

からはOKだ。

これは潔癖症なのだろうか。

なかなか治そうとしても治らないので、半ば諦めてはいるが、友人にも触れないとなると嫌われないか心配であるが、レイチエルはそんなカルラの側にずっと居てくれるので助かっている。

チラリと時計を見ると七時三十分を回っていた。

仕事の時間だ。

周りの使用人達も席をどんどん空けていくので、カルラとレイチエルも仕事場に行く。

カルラとレイチエルは配置が違うのでここでお別れだ。

カルラの今日の仕事は洗濯と浴槽の清掃だ。

浴槽は王族のみが使用する専用の浴槽なので、隅々まで清掃する必要があるため、ほとんどのメイドが嫌がる場所の一つだ。勿論、カルラも昨日メイド長から言われた時は内心嫌だなと思っていた。カルラの嫌だは、他人が使った浴槽に触れると言うこと。素手ではやってられないため、ゴム手袋は常備品だ。

そしてカルラはポケットから使い捨て手袋を二つ出して両手にはめた。

「…よし！」

朝と同じく気合いを入れ、まずはデッキブラシを手に取った。

第2話

ヤバい、ヤバい。

カルラは焦っていた。

王族専用の浴槽に時間が掛かりすぎた。…と言っても、あんな馬鹿広い所を一人って無茶な話だわ。メイド長に人員を増やすように言おうかしら、と考えたがすぐに意識の隅に追いやった。

次は浴槽の清掃を終えたから、後はバスタオルの用意だ。

それが終わったら次は洗濯…。まったく、忙しい忙しい。

今、カルラは新しいバスタオルを取りに行き、パタパタと誰もいない廊下を大量のバスタオルを抱えながら走る。もし誰かいたら廊下を走るのはしないが、今は時間が無いので走っている。

パサッ…、

「…あつ」

やっちゃった…。

バスタオルが一枚、落ちてしまった。

カルラは大量のバスタオルを抱えているため、手を伸ばせない。

一旦バスタオルを床に置こうか迷ったが、床から再び持ち上げるには重すぎた。

それに、カルラは身長が低い（二十歳にして百五十五センチ位）、前があまり見えない。どこに落としかわからない。

ま、仕方ないから後で取りに来よう。

そう考え、浴槽に戻ろうと踵を返した時…。

「これ、落としかか？」

「え？」

振り返ると、言うまでもなく白いバスタオルの山に視界が占拠

されている。

相手の顔が見えないので体を横向きにし、顔を声の主に向ける。

「…皇帝陛下っ!?」

そこには銀髪を肩上で切り揃え、髪と同色の瞳を持つ超美形の男、ガーティレン帝国帝王『レイティス・ガーティレン』が目の前にいた。その手にはさつき落としたバスタオルが。

「大丈夫か？手伝おうー…」

「い、いいえ！だ、ただ、大丈夫…です…!」

カルラは初めてこんな至近距離でレイティスを見て、見事にパニックをお越しかけている。

「そうか」

レイティスはそう言うと、カルラが抱えているバスタオルの上に拾ったバスタオルを置いた。

「…置いたのは良いんだけど、ありがたかったんだけど……」。

バスタオルを置きざまに、陛下の手が、わ、わた、私の手に当たって…!

「……ヒッ!」

思わず口から出た声(?)。それと同時に全身が粟立つ。

お、おと男の人に、さ、触られた!?!?!?

カルラは目眩と共に意識を手放した。

第3話

「……むう……ん？」

あら？

この天井、知ってる。

ああ、自分の部屋か……。

って……

「あああー！！」

うわあー！

今一瞬で全て思い出した！

そうだ、私陛下に会って手が当たって……当たっ……て？

「……起きた？」

「あ……、メイド長」

メイド長はニコツと笑うと、片手に持っていた温かいお茶をカルラに手渡した。有り難う御座います、と言ってカルラはそれを飲んだ。

「それにしても……まさか陛下の前で気絶するとはねえ」

「……すみません」

そう。私はやっぱりあの時気絶したんそうです。

ああ……。これはもしかしたらクビかなあ。そう考えていた時、扉が大きく二回、ノックされた。するとメイド長が出てくれて、なにやら話をしている。ここからじゃあまり良く聞こえない。

ちようど気になって見に行こうとしたら、レイティス皇帝陛下が突然現れました。

「……へ、陛下！？あ、あの先程は……」

「カルラと言ったな。調子はどうだ？」

カルラはとりあえず謝ろうとしたところを、レイティスが発した事で最後まで言えなかった。

「え…？あ、はい。大丈夫…です」

「そうか。なら良い」

何だか訳がわからなくなっていたカルラに、レイティスは一つ質問した。

「…先程メイド長に聞いたが、お前は人に触れないとは本当か？」

「…はい」

「この私でもか」

「…申し訳ございません」

カルラは俯きながら、プルプルと震えるのをこらえながら泣きそうなのにも耐えた。

すると、肩をポンツと優しく叩かれた。カルラは少しビクツとしたが、それだけだった。

「服の上からなら大丈夫なのか」

「は、はい…。ギリギリ」

小さく返事をし、カルラは顔を少し上げると、驚いたことにレイティスが優しく微笑んでいた。

勿論、こんな美形男子に微笑まれたらどんな女性でもコロツと落ちてしまうだろう。現に、カルラもドキツとした。耳が熱い。

再び俯くと、レイティスはクスリと笑い、そろそろ執務があるからと退室した。

レイティスは扉に手を掛けそのまま行くかと思っただら、一度振り向いてカルラに爆弾を落としていった。

「また、会いにこよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2090ba/>

触らないで下さい！！

2012年1月6日09時48分発行